

## 三角級数の極限定理

金沢大 理 高橋 茂

### 1. 三角級数の中心極限定理

$(\Omega, \mathcal{F}, P)$  を確率空間,  $\{X_n(\omega)\}$  をその上の確率変数列とする。そのとき中心極限定理とは適当な条件のもとで  
「 $\exists A_N, B_N; A_N^{-1} \sum_1^N X_n - B_N$  の分布が Gauss 分布に収束する」  
ことを主張する定理である。 $\{X_n\}$  が独立のとき、きわめて一般的な条件のもとで中心極限定理の成り立つことが知られている。その一つとして次の Lindeberg の定理がある。

定理 A.  $\{X_n\}$  は独立で,  $E(X_n) = 0, E(X_n^2) < +\infty,$

$$(1.1) \quad \sigma_N^2 \equiv \sum_1^N E(X_n^2) \rightarrow +\infty, \quad E(X_N^2) = o(\sigma_N^2), \quad N \rightarrow +\infty,$$

とする。そのとき任意の実数  $x$  に対して

$$(1.2) \quad \lim_{N \rightarrow \infty} P\left(\sigma_N^{-1} \sum_1^N X_n \leq x\right) = (2\pi)^{-1/2} \int_{-\infty}^x e^{-u^2/2} du$$

が成り立つ必要十分条件は

$$(1.3) \quad (\varepsilon > 0) \quad \lim_{N \rightarrow \infty} \sigma_N^{-2} \sum_1^N \int_{|X_n| > \sigma_N \varepsilon} X_n^2 dP = 0.$$

注意. (1.1) のもとで (1.3) は次の (1.4) と同等である。

$$(1.4) \begin{cases} \max_{1 \leq n \leq N} |X_n / \sigma_N| \rightarrow 0, & \text{in probability,} \\ \sigma_N^{-2} \sum_1^N X_n^2 \rightarrow 1, & \text{in } L_1\text{-mean, } N \rightarrow +\infty. \end{cases}$$

独立とは限らぬ  $\{X_n\}$  について (1.2) の成り立つ十分条件が S. Bernstein, M. Loève 等によって独立の場合と「類似な形」で与えられている [2]. けれども等号は当然のことであるが「条件付き平均値」にがんするものである。

一方三角級数について R. Salem と A. Zygmund は次のことを示した ([10], p.p. 263 - 269).

定理 B.  $L_N(t) = \sum_1^N c_k \cos 2\pi(n_k t + \alpha_k)$ ,  $\|L_N\| = (2^{-1} \sum_1^N c_k^2)^{1/2}$  とおく. そのとき

$$n_{k+1} \geq n_k(1+c) \quad (c > 0)$$

$$\|L_N\| \rightarrow +\infty, \quad c_N = o(\|L_N\|), \quad N \rightarrow +\infty$$

であれば, 任意の集合  $E$  ( $|E| > 0$ ) と任意の実数  $\varepsilon$  に対して

$$(1.5) \quad \lim_{N \rightarrow \infty} \frac{|\{t; t \in E, L_N(t) \leq \|L_N\| \varepsilon\}|}{|E|} = (2\pi)^{-1/2} \int_0^\varepsilon e^{-u^2/2} du.$$

また  $n_{k+1} \geq n_k(1+c)$ ,  $(c > 0)$ ,  $\|L_N\| \rightarrow +\infty$ ,  $N \rightarrow +\infty$  のとき  $c_N = o(\|L_N\|)$  は (1.5) の必要条件である。

即ち Hadamard gap をもつた三角級数の部分和については独立変数の和と同じに中心極限定理が成立する (定理 A 参照)。

こゝでは lacunary とは限らぬ三角級数

$$\sum a_k \cos 2\pi(kx + \alpha_k), \quad (\sum a_k^2 = +\infty),$$

の中心極限定理をいさぐる. 三角函数系は確率論の意味で独

立ではないが、先に述べた従属変数の中心極限定理の条件を  
 ためすことは至難のことと思われる。そこで三角級数を「独  
 立に近い成分」の和と考え、独立変数の和を扱った方針に従  
 うことにする。「独立に近い成分」としては(幾つかの事実  
 から)  $n_{k+1}/n_k \geq q > 1$  をみたす列  $\{n_k\}$  にたいして

$$\sum_{m=n_k+1}^{n_{k+1}} a_m \cos 2\pi(mt + \alpha_m)$$

をとることが適当であると思われる。

定理 1.  $S_N(t) = \sum_1^N a_k \cos 2\pi(kt + \alpha_k)$ ,  $A_N = (2^{-1} \sum_1^N a_k^2)^{1/2}$  とおく。

$$(1.6) \quad n_{k+1}/n_k \geq q > 1$$

をみたす正の整数列  $\{n_k\}$  があって

$$\Delta_1(t) = S_{n_1}(t), \quad \Delta_k(t) = S_{n_k}(t) - S_{n_{k-1}}(t), \quad (k \geq 1),$$

としたとき,  $k \rightarrow +\infty$  で

$$(1.7) \quad \begin{cases} \max_t |\Delta_k(t)| = o(A_{n_k}), \\ A_{n_k}^{-2} \sum_{m=1}^{n_k} \{\Delta_m^2 + 2\Delta_m \Delta_{m+1}\} \rightarrow g(t), \text{ in } L_1\text{-mean,} \end{cases}$$

がある  $g(t)$  にたいして成立するとする。そのとき  $g(t) \geq 0$ ,

$\int_0^1 g(t) dt = 1$  となり, また  $|E| > 0$  で  $x \neq 0$  であるならば

$$(1.8) \quad \lim_{N \rightarrow \infty} |\{t; t \in E, S_N(t) \leq x A_N\}| / |E| \\ = (\sqrt{2\pi} |E|)^{-1} \int_E dt \int_{-\infty}^{x/\sqrt{g(t)}} e^{-u^2/2} du,$$

こゝに  $x/0$  は  $x > 0$  ( $x < 0$ ) のとき  $+\infty$  ( $-\infty$ ) であるとする。

さきの定理 B では  $\Delta_{2k}(t) = 0$ ,  $\Delta_{2k+1}(t)$  が唯一項からなる  
 様に (1.6) の  $\{n_k\}$  をとれる。このとき  $c_N = o(\|L_N\|)$  は (1.7) の

始の条件である。これは定理 B では必要であった。

注意 1.  $g(t)$  が constant のとき (1.8) の右辺は Gauss の分布である ((1.4) で  $g(t) = 1$  となるのは Kolmogorov の 0-1 法則)。

2.  $g(t) \geq 0$ ,  $\int_0^1 g(t) dt = 1$  である任意の  $g(t)$  に対して (1.8) が成り立つ様な三角級数がある。

3.  $\lim_{k \rightarrow \infty} A_{n_k}^{-2} \sum_{m=1}^k \Delta_m \Delta_{m+1}$  が存在して、 $\neq 0$  である三角級数がある ( $\{\Delta_k(t)\}$  は asymptotically one-dependent である)。

$|E| > 0$  であるとき (1.8) の右辺の分布関数の特性関数は

$$|E|^{-1} \int_E \exp(-\lambda^2 g(t)/2) dt$$

である。従って定理 1 の証明には、任意の実数  $\lambda$  に対して

$$\lim_{N \rightarrow \infty} \int_E \exp\{i\lambda S_N(t)/A_N\} dt = \int_E \exp(-\lambda^2 g(t)/2) dt$$

が成り立つことを示せばよい ([3] を参照)。

## 2. Lacunary Trigonometric Series の中心極限定理

定理 2.  $S_N(t) = \sum_{k=1}^N a_k \cos 2\pi(n_k t + \alpha_k)$ ,  $A_N = (\sum_{k=1}^N a_k^2)^{1/2}$  とおく。

$$n_{k+1} \geq n_k (1 + c k^{-\alpha}), \quad (c > 0, 0 \leq \alpha \leq 1/2),$$

$$A_N \rightarrow +\infty, \quad a_N = o(A_N N^{-\alpha}), \quad N \rightarrow +\infty$$

ならば、 $|E| > 0$  のとき任意の実数  $x$  に対して

$$\lim_{N \rightarrow \infty} \left| \{t; t \in E, S_N(t) \leq x A_N\} \right| / |E| = (2\pi)^{-1/2} \int_{-\infty}^x e^{-u^2/2} du.$$

注意 1.  $\alpha = 0$  のときが定理 B である。

2.  $a_N = o(A_N N^{-\alpha})$  を  $a_N = O(A_N N^{-\alpha})$  でおきかえることは出来ない ([7] を参照)。

証明は (1.7) が  $g(t)=1$  で成り立つことを示せばよい. その  
 ため  $p(k) = \max\{m; n_m \leq 2^k\}$  とし,  $\Delta_k(t) = S_{p(k)}(t) - S_{p(k)-1}(t)$   
 とおく (即ち (1.6) の  $n_k = 2^{k+1}$  とおく). そのとき

$$\max_t |\Delta_k(t)| = o(A_{p(k)}), \quad k \rightarrow +\infty,$$

$$A_{p(k)}^{-2} \sum_{m=1}^k \Delta_m^2 \rightarrow 1, \quad A_{p(k)}^{-2} \sum_{m=1}^k \Delta_m \Delta_{m+1} \rightarrow 0, \quad (\text{L}_2\text{-mean})$$

を示すことが出来る ([4] を参照).

また定理 2 と同じ方法で次の定理が示される ([5] 参照).

定理 2'.  $S_N(t) = \sum_1^N a_k \cos 2\pi(n_k t + \alpha_k)$ ,  $A_N = (2^{-1} \sum_1^N a_k^2)^{1/2}$  とおく.

$$n_{k+1} \geq n_k(1 + c_k k^{-1/2}) \quad (c_k \rightarrow +\infty, k \rightarrow +\infty)$$

$$A_N \rightarrow +\infty, \quad a_N = o(A_N N^{-1/2}), \quad N \rightarrow +\infty,$$

であるならば,  $|E| > 0$  とき任意の実数  $x$  に対して

$$\lim_{N \rightarrow \infty} \{t; t \in E, S_N(t) \leq x A_N\} / |E| = (2\pi)^{-1/2} \int_0^x e^{-u^2/2} du.$$

P. Erdős は上の定理を  $a_k = 1$ ,  $k \geq 1$ ,  $E = [0, 1]$  のとき,

「Markov の方法」で証明した [1].

### 3. Lacunary Fourier Series

定理 2 を用いて次のことが示される.

定理 3.  $\{n_k\}$  と  $\{a_k\}$  は次の条件を満たす:

$$n_{k+1} \geq n_k(1 + c k^{-\alpha}) \quad (c > 0, 0 \leq \alpha \leq 1/2),$$

$$A_N \equiv (2^{-1} \sum_1^N a_k^2)^{1/2} \rightarrow +\infty, \quad a_N = o(A_N N^{-\alpha}), \quad N \rightarrow +\infty.$$

そのとき, どんな  $\{\alpha_k\}$  に対しても  $\sum a_k \cos 2\pi(n_k t + \alpha_k)$

は a.e. で発散し, かつ Fourier series ではない.

注意  $\alpha=0$  のときが Zygmund の定理である [9] p.203).

証明  $T_N(t) = \sum_1^N a_k A_k^{-1} \cos 2\pi(n_k t + \alpha_k)$  とおくと

$$T_N(t) = S_N(t) A_N^{-1} + \sum_1^{N-1} S_k(t) (A_k^{-1} - A_{k+1}^{-1}).$$

いまある  $\{\alpha_k\}$  について  $\sum a_k \cos 2\pi(n_k t + \alpha_k)$  がある正測度の集合の上で収束すれば,  $\sum a_k A_k^{-1} \cos 2\pi(n_k t + \alpha_k)$  も又正測度の集合の上で収束する. 先の級数が Fourier series であれば  $S_N(t)$  は  $L_p$  ( $p < 1$ ) で収束するから,  $T_N(t)$  は  $L_1$  で収束し, フーリエ級数に収束する. 一方  $2^{-1} \sum_1^N a_k^2 A_k^{-2} \sim \log A_N$ ,  $N \rightarrow +\infty$ , であり, 定理 2 により  $T_N(t) / \sqrt{\log A_N}$  は任意の正測度の集合の上で asymptotically normal である. 従って  $\lim_{N \rightarrow \infty} N_k = +\infty$  である任意の  $\{N_k\}$  について  $\overline{\lim}_{k \rightarrow \infty} |T_{N_k}(t)| = +\infty$ , a.e..

上のことから判る様に定理 3 の条件  $a_N = O(A_N N^{-\alpha})$  は

$$a_N = O(A_N \sqrt{\log A_N} \cdots \log_p A_N N^{-\alpha}), \quad N \rightarrow +\infty,$$

でおきかえられる. ここで  $\log_p A_N$  は  $\log$  を  $p$  回とることを示す.

又直接に任意の  $\{\alpha_k\}$  について,  $\overline{\lim}_{k \rightarrow \infty} |S_{N_k}(t)| = +\infty$ , a.e. を示すことが出来る [6]. ただし  $\{N_k\}$  は  $\lim_{k \rightarrow \infty} N_k = +\infty$ .

定理 4  $1 \leq r < 2$  とし,  $(c, \alpha)$  は ( $c > 0$  で  $0 \leq x < 1$ ) が ( $c \geq 1$  で  $x = 1$ ) とする.  $\{n_k\}$  と  $\{a_k\}$  が

$$n_{k+1} \geq n_k (1 + c k^{-\alpha}),$$

$$A_N \equiv (2^{-1} \sum_1^N a_k^2)^{1/2} \rightarrow +\infty, \quad a_N = O(A_N^{1/(2-r)} N^{-\alpha}), \quad N \rightarrow +\infty,$$

をみたすとき, どんな  $\{\alpha_k\}$  に対しても  $\sum a_k \cos 2\pi(n_k t + \alpha_k)$

は  $L_r(0,1)$  の函数の Fourier series ではない。

注意 1.  $1 < r < 2$ ,  $\alpha < 1$  のとき  $\sum |a_k|^{r/r-1} < +\infty$  で定理の条件をみたす  $\{a_k\}$  がある。  $1 < r < 2$ ,  $\alpha = 1$  のとき定理の条件をみたさない  $\sum |a_k|^{r/r-1} = +\infty$  である  $\{a_k\}$  がある (Hausdorff-Young の定理を参照)。

2.  $a_k \rightarrow 0$  ( $k \rightarrow +\infty$ ) のとき (この場合のみ考えればよいのである)  $\alpha = 1$ ,  $r = 1$  であれば  $a_N = O(A_N^2 N^{-1})$  は不可能な条件である。

3. ( $c > 0$ ,  $0 < \alpha \leq 1/2$ ),  $1 \leq r < 2$ ,  $\{\varphi(n)\}$ , ( $\lim_{n \rightarrow \infty} \varphi(n) = +\infty$ ), を勝手にならしたとき  $\{n_k\}$ ,  $\{a_k\}$  があって

$$n_{k+1} \geq n_k(1 + ck^{-\alpha}),$$

$$A_N \equiv \left(2^{-1} \sum_1^N a_k^2\right)^{1/2} \rightarrow +\infty, \quad a_N = O\left(A_N^{2/(2-r)} \varphi(N) N^{-\alpha}\right), \quad N \rightarrow +\infty,$$

で  $\sum a_k \cos \frac{(2\pi)}{n_k} t$  が  $L_r(0,1)$  の函数の Fourier series である様になる ( [8] 参照 )。

略証. ある  $\{\alpha_k\}$  にたいして  $\sum a_k \cos 2\pi(n_k t + \alpha_k)$  が  $f(t) \in L_r(0,1)$  の函数の Fourier series であるとする。  $p(k) = \max\{m; n_m \leq 2^k\}$  とし,  $T_k(t)$  を  $f(t)$  の Fourier series の  $n_{p(k+1)}$  次の  $(C,1)$  平均とする。 すなわち

$$T_k(t) = \sum_{m=1}^{p(k+1)} \left\{1 - \frac{n_m}{n_{p(k+1)}+1}\right\} a_m \cos 2\pi(n_m t + \alpha_m).$$

$B_k = \left(\int_0^1 |T_k(t)|^2 dt\right)^{1/2}$  とすれば

$$B_k \sim A_{p(k+1)}, \quad k \rightarrow +\infty$$

が云える。(面倒な計算をして) 常数  $C$  があって

$$\int_0^1 |T_k(t)|^4 dt \leq C B_k^{(8-2r)/(2-r)}, \quad k \geq 1.$$

任意の  $E \subset [0, 1]$  について Hölder の不等式から

$$\begin{aligned} \int_E |T_k(t)/B_k|^2 dt &\leq B_k^{-2} \left( \int_E |T_k(t)|^r dt \right)^{2/4-r} \left( \int_0^1 |T_k(t)|^4 dt \right)^{\frac{2-r}{4-r}} \\ &\leq C \left( \int_E |T_k(t)|^r dt \right)^{2/4-r}, \quad k \geq 1. \end{aligned}$$

また  $\lim_{k \rightarrow \infty} T_k(t) = f(t)$  が  $L^2$ -norm で云えるから,  $\{T_k(t)/B_k\}^2$  は「一様に可積分」である.  $\lim_{k \rightarrow \infty} T_k(t) = f(t)$  a.e. と  $\lim_{k \rightarrow \infty} B_k = +\infty$  とから  $\lim_{k \rightarrow \infty} \int_E |T_k(t)/B_k|^2 dt = 0$  が云える. これは  $B_k$  の定義に反する ([8] 参照).

#### 4. Lacunary ということ

lacunary series の項の「散らばりの状態」は多様性があるから簡単には表ゆせない.  $\{n_k\}$  が Hadamard gap をもつとき級数  $\sum a_k \cos 2\pi(n_k t + \alpha_k)$  は興味ある性質を持っている. こからの性質は「通常の級数」にはどのような様に隣連しているのぞあろうか? を向題にする. そのとき「項の散らばり具合」を適当に定義し, Hadamard gap をもつ列と通常の列とが特別な場合として表される様にしなければならぬ. ここで  $(c, \alpha)$  を用いて

$$n_{k+1} \geq n_k (1 + c k^{-\alpha}), \quad k \geq 1,$$

が項の「散らばり具合」を表ゆした. ( $c > 0, \alpha = 0$ ) のとき  $\{n_k\}$  が Hadamard gap をもつときを,  $n_k = k$  のとき



( $c=1, \alpha=1$ ) で表される。例えば定理4は Hadamard gap をもつ三角級数についての Zygmund の定理が - の特別な場合として表されることを示している。

文 献

- [1] P. Erdős: On trigonometric sums with gaps. Magyar Tud. Akd. Kutatos Int. Közl., 7(1962), 37-42.
- [2] M. Loève: Probability theory, Van Nostrand. N.Y., 1955.
- [3] S. Takahashi: A version of the central limit theorem for trigonometric series, Tôhoku Math. Journ. 16(1964), 384-398.
- [4] \_\_\_\_\_: On lacunary trigonometric series, Proc. Japan Acad., 41(1965), 503-506.
- [5] \_\_\_\_\_: On trigonometric series with gaps, Tôhoku Math. Journ. 17(1965), 227-234.
- [6] \_\_\_\_\_: On the lacunary Fourier series, Tôhoku Math. Journ. 19(1967), 79-85.
- [7] \_\_\_\_\_: On lacunary trigonometric series II, (under the press).
- [8] \_\_\_\_\_: On trigonometric Fourier coefficient.
- [9] A. Zygmund: Trigonometric series, Vol. I. Cambridge University Press, 1959.
- [10] Ibid., Vol. II.